

「分科会総括報告会」

戸田敏行（愛知大学）・蔣湧（愛知大学）・駒木伸比古（愛知大学）・
岩崎正弥（愛知大学）・和田明美（愛知大学）

日 時：2017年1月28日（土）17：00～17：30

場 所：愛知大学豊橋校舎 逍遙館2F

○分科会1「越境地域とガバナンス」総括

戸田敏行（愛知大学）

本分科会では、越境地域のガバナンスについて5題の発表がなされた。前半の3題はガバナンスに関する調査研究報告であり、後半の2題は越境地域を対象とした社会実験の報告である。以下に概要と質疑内容をまとめる。

1. 「地方創生交付金対象事業における越境連携事業（小川勇樹・愛知大学）」は、地方創生事業における行政界を越えた越境連携事業の全国的特性を分析したものである。先行型交付金、加速化交付金、推進交付金の事業のうち越境連携事業は517であり、県境を越え隣接する「越境・隣接連携」、県境を越え離れた「越境・遠隔連携」、県内で隣接した市町村間の「県内・隣接連携」、県内で離れた市町村の「県内・遠隔連携」に分類し、各連携の地域特性、事業内容特性が報告された。質疑では、越境・遠隔地連携が同隣接連携を上回る状況から、遠隔地連携の可能性と連携に至るプロセス等について意見が交換された。

2. 「インフォーマルな交流を介した越境地域の産業経済連携に関する研究（佐藤遼・東京大学）」は、越境連携に関する民間活動の先導性についての山陰と瀬戸内の事例研究である。山陰（鳥取県米子市・島根県松江市）の例では、商工会議所等の経済組織が先行しており、県境を越える戦中の銀行合併で発足した山陰合同銀行が、ビジネスマッチングなどの役割を担っている。また、瀬戸内（広島県尾道市・愛媛県今治市）の例では、自治体レベルの観光連携が先行するもののサイクルツーリズムに関するNPOが役割を担っていることが報告された。質疑では、連携が広域ブロックに拡大する場合の民間の活動実態、民間活動の比較などにつ

いて意見が交換された。

3. 「中国内モンゴル自治区を中心とする越境的な経済連携について（曉敏・内蒙古大学）」では、内モンゴル自治区の省境をこえる越境連携についての実態報告である。内モンゴル自治区は地理的に東・中・西に地域が分かれ、8つの省に隣接するため、国家的な地域開発計画として「東北地区振興計画」など、省より下位となる地級市レベルの「遼西蒙東経済区連合体」など、多くの越境的な経済連携組織に参加している。中には実態の無いものや実施内容が重複しているものも多いのが実情であり、内モンゴル自治区全体の地域計画策定の必要性が述べられた。質疑では、中国の地方分権の進捗状況と地方分権に対して越境連携の果たす意義などについて意見が交換された。

4. 「半島文化の内発的発展と越境ネットワーク化に関する研究（嶋津隆文・フォーラム自治研究所）」は、遠隔的な越境連携に関する社会実験として、渥美半島と松浦半島の連携に関する会議と交流機会を創出したものである。半島地域間連携の背景は、半島振興法の新規展開を指向したものである。2つのテーマを持っており、第1は半島文化として住民活動、体験学習、窯業などの交流であり、第2は連携における大学の役割の検討である。これらについて、ワークショップでの検討結果が報告された。質疑では、異なる半島文化の連携の仕方、大学が連携に機能を持つ場合の実現手法などについて意見が交換された。

5. 「県境をまたぐ共生圏の創生（青山幸一・愛知長野県境域開発協議会）」は、三遠南信地域の先行的な越境連携組織として、昭和52年に5つの県境山間地域町村で設立された愛知・長野県境域開発協議会の社会実験的活動に関する報告である。報告内容は、同協議会の40年の活動史の特徴の紹介と、町村長シンポジウムに

よる今後の展望である。シンポジウムの総括として、県境地域の現状認識、三遠南信地域連携の評価と課題、将来的な展望がまとめられている。また三遠南信地域全体として公式ビジョンの改訂中であり、県境山間部からより広域的な越境連携ビジョンに影響を与える試みとなっている。質疑としては、中山間部の観光などに対する大都市部からのアプローチ手法、越境的な交通ネットワークの形成等について意見が交換された。

○分科会2「越境地域と空間情報」総括

蔣湧（愛知大学）

第2分科会は「越境地域と空間情報」をテーマに、越境地域の情報基盤に欠かせない視点、理論、手法と技術を用いた地域防災やインフラ点検整備について、研究報告者4名と参加者24名の間に学術交流を行った。この分科会のコーディネーターは愛知大学地域政策学部の蔣湧教授、コメンテーターは慶応大学環境情報学部の巖網林教授に務めて頂いた。

本分科会はポスターセッションとワークショップ、2つの形態を融合した形で行った。前半のポスターセッションでは、まず発表者からポスターの概要を紹介し、次に参加者は自由にポスターを観覧しながら、発表者と直接議論を行った。後半のワークショップでは、各ポスターに関する議論が報告され、次に参加者らは持ち込み課題や感想などを述べ、とりわけ大学、企業と行政を連携した地域研究のあり方について、議論を行った。最後にコメンテーター総括を行い、分科会は時間内に無事終了した。

次に、分科会4つの研究発表の主な内容をまとめる。

第1番目は、ナカシャクリエイテブ株式会社の中井春香氏と久世晋一郎氏の「歴史的知見と科学的手法を合わせたGIS」の発表である。災害時液状化発生箇所 の推定に、現代ボーリングデータに古代地層のデータを加えた結果、推計精度が大幅に改善された。本研究の液状化推定箇所と1891年「美濃・尾張地震」の慰霊碑の場所が一致していることも確認され、この推定法の有効性が報告された。また、機械学習を用いて、地域の旧地名から災害の危険性を探ることも試みた。

第2番目は、慶応大学の巖網林先生、大木聖子先生と学生たち4人の共同研究として「津波災害の棄物処理」の研究発表である。この研究は、県境を越えた田原市と湖西市を対象に、津波災害廃棄物の「質」と「量」

の推定をはじめ、津波災害廃棄物の仮置き場候補地の選定と廃棄物処理能力の推計も含め、複数の視点から南海トラフ巨大地震による災害廃棄物処理の研究を行った。この研究の過程において、聞き取り調査、現場視察、GIS分析とドローンによる空撮など様々な研究手法を取り入れ、実践的な研究成果が報告された。

第3番目は、愛知大学の加藤達也氏の「安城・岡崎域内の矢作川流域にける水害リスクの評価」の発表である。安城市と岡崎市を挟む矢作川流域に着目し、行政区を越えた水害リスクに対し、災害因子、災害暴露と災害脆弱性、いわば災害研究フレームワークを踏まえた数値分析結果を報告された。この研究は、大量なデータとGIS技術を用いて、域内の浸水想定エリアを災害因子として、浸水想定エリア内の住宅、世帯と人口をはじめ、交通システム、商業施設、学校、工場、公共施設、さらに地域産業、自動車部品産業のサプライチェーンを対象に、災害暴露と災害脆弱性を検証した。

最後にはマップクエスト社の佐藤亮介社長と澤田貴行氏が「GIS会社からみたドローン産業の現状と課題」の報告を行った。マップクエスト社は、地元のGIS会社として、平成25年度補正予算案事業「新しいものづくり補助金」に採択され、豊橋技術科学大学との共同研究で、GISにドローンと高精度の画像処理技術を融合した橋梁維持管理システム開発に取り組み、この経緯を紹介された。この事業は、インフラの高齢化時代に突入した今日の地域社会にとって、無視できない分野であり、マップクエスト社が掲げた「GISで社会を豊かに」という経営理念に一致した事業である。報告の後半は、これまで遭遇したドローン墜落事故に触れ、ドローン研究と開発に蓄積した教訓と経験を皆さんに共有し、さらに直面している課題も的確にまとめた。

○分科会3「越境地域と産業・経済」総括

駒木伸比古（愛知大学）

第3分科会では、「越境地域と産業・経済」のテーマで5つの発表がなされた。第1発表「三遠南信と周辺地域の空間経済分析に関する研究」（渋澤博幸【豊橋技術科学大学】ほか）は、市町村を単位として三遠南信地域および周辺地域における産業連関表に基づきシミュレーションを行うことで、地域間交易の活発化、産業間交易の活発化、震災などによる生産活動停止、という3つのシナリオでの産業状況の変化を示したもの

である。その結果、地域間交易が活発化した場合は、特に遠州地域で増加額が大きくなること、産業間交易が活発化した場合には次世代輸送機器産業および輸送機器産業などの増加が高くなること、そして生産活動停止の場合は尾張・西三河における生産活動が停止した場合が最もダメージが大きくなること、が明らかとなった。質疑応答では、航空宇宙産業クラスターへの展望や、リニア開通による三遠南信地域におけるつながりの変化について意見交換が行われた。

第2発表『「三遠南信地域に関するアンケート調査」結果にみる三遠南信地域内企業間取引等の現状・課題について』（林 郁夫 [しんきん南信州地域研究所]）は、「三遠南信しんきんサミット」参加者に対して行ったアンケート調査から、三遠南信地域内企業間取引等の現状や課題、意識、期待などを分析したものである。三遠南信地域内での企業取引をさらに増加させるために、ハード整備（道路整備など）とソフト整備（企業個別情報の交流活発化、人的ネットワークの強化など）が求められているなかで、各地域ごとに三遠南信各地域に対する地域の魅力や産業等に対するイメージの違い、広域連携に対する意識や期待の違いなどがあることが指摘された。質疑応答では、地域金融機関の役割や情報面での拡充の必要性などが話題に上った。

第3発表「県境道路沿道ゾーンの地域構造に関する研究」（小塚みすず [神戸市立工業高等専門学校]）は、福井・岐阜県境にまたがる国道417号の整備・建設状況およびそれに付随した地元自治体の取り組みについての報告である。こうした地域はいわゆる条件不利地域であり、特に観光ルートおよび災害時の緊急輸送ルートとしての整備の必要性が示された。質疑応答では、国道整備以前からの越境交流の状況や、道路整備による社会資本別に果たす役割などがトピックに挙げられた。

第4発表「広域地方圏と大都市圏を結合するゲートウェイ・シティとしての豊橋市の地域特性に関する地理学的研究」（阿部亮吾 [愛知教育大学] ほか）は、豊橋市を名古屋大都市圏と三遠南信地域の結節点「ゲートウェイ・シティ」と位置付け、居住環境・まちなか居住、公共交通体系、消費環境、都市近郊農業・観光レクリエーション、教育環境再編・グローバル人材、という5つのテーマをそれぞれ地理学的視点に基づき検討したものである。その結果、豊橋市のゲートウェイ・シティ機能はここ数10年で空間的縮小していること、農業的消費機能が越境性を保持していることが示

された。質疑応答では、大学生の首都圏への流出状況、浜松市と豊橋市との商業動向の違い、都市・都市圏の機能の定義に関して議論がなされた。

第5発表「ベトナム・ラオス間国境地域開発と越境物流に関する一考察」（名和聖高 [愛知大学]）は、ラオスおよびその背後にあるタイをはじめとする大メコン圏諸国とベトナムとの港湾を結ぶ道路港湾整備および通関事情に関する現状レポートである。フィールドワークに基づく調査を通じて、官主導の国境地域開発の限界、隣国への期待と現状との相違、越境物流環境整備・改善を手段とした国境物流開発の必要性が指摘された。質疑応答では、越境後の交通制度およびシステムや、中国までの経路開通後の将来性についての情報交換が行われた。

コメンテーター（佐藤正之 [名古屋経済大学]）からは、本分科会は産業連関とリニアと取引などの産業・企業間取引における越境と、道路インフラ・地理的視点からみた越境という2つの視点があること、それぞれの研究内容を組み合わせた越境研究の展開への期待、例えば産業連関表の結果と企業アンケートの結果を組み合わせることによって、三遠南信地域間の連携を誘発することなどが提示された。

○分科会4「越境地域と医療福祉」総括

岩崎正弥（愛知大学）

本年度は午前中の記念講演・基調講演と連動させて、新たに医療・福祉をテーマとする分科会4を立ち上げた。

まず午前中に記念講演をいただいた大島伸一氏（国立長寿医療研究センター名誉総長）より、愛知県地域再生・まちづくり研究会の提言（『長生きを喜べるまちへ「愛知への提言」』）を踏まえた「医療・福祉のまちづくり提案」をいただいた。人口減少・少子高齢化の厳しい予測を前提に、「まちが家族に」「高齢者が若年者を支える」「地域の力で」行う「まちづくり」しかないとの見解を披露された。その後、長谷川敏彦氏（未来医療研究機構代表理事）の巧みなコーディネートのもと4名のパネリストを加えたディスカッションを行った（なお登壇予定であった伊藤憲祐氏は急病のため欠席された）。

さわらび会の山本左近氏（統括本部長）からは、55年間に及ぶさわらび会の先駆的な取組み（在宅医療や

医療・福祉の結合等)が紹介された。また16回目を迎えた全国福祉村サミット、2016年から立ち上げた地域福祉サミット等の紹介を通して、半径2kmのコミュニティの大切さが強調された。石田芳弘元犬山市長からは、犬山市民病院建設をストップし特別養護老人ホーム建設へと転換した苦労話が紹介され、今後はシステムとしての国家(nation)ではなく、人的ネットワーク共同体としての自治体(land)に軸足を置くべきこと、そのエネルギー源として地域の祭の持つ意義が力説された。穂積亮次新城市長からは、現職の自治体首長として新城市民病院を支える重要性和難しさが紹介され、医療関係者のキャリア形成を地域ぐるみで支える仕組みに言及された。そして医療・福祉のまちづくりは専門家の(専門)越境も含め、地域住民の「互助」という負担を弁えながらも徹底的に進めるしかないという持論を展開された。安井俊夫元愛知県教育長・現愛知総合看護福祉専門学校長からは、県職員時代のゴールドプラン等の策定の思い出に触れつつ「福祉は人づくり」にもかかわらず、福祉人材不足という現状を抱えていることに憂慮を示された。併せて長久手市の挨拶から始まる小学校単位のまちづくりの重要性を強調された。こうした個々の報告に対し、大島氏からは丁寧なコメントが寄せられ、特に医師・看護師等の医療関係者は公的資源だという認識が欠如している現状を問題視する発言がなされた。

医療福祉の現場、政治の現場、教育の現場とパネリストの所属・立場が異なるなか、「まちづくり」という共通の括りにおいて専門を超えた意見交換がなされたが、フロアとの質疑応答では「地域包括ケアシステム」の仕組みづくりに話題が及んだ。「団塊の世代」がすべて後期高齢者を迎える2025年問題は、医療費の膨張で財政破綻の危機に瀕している社会保障制度の再建が急務であることを教えているが、その一方で「互助」という地域住民相互の支え合いの重要性が注目されている。フロアとはこの仕組みづくりについて意見交換を行い、特に支え合いを担保する動機は何かという問題が挙げられた。地方自治のありかた、特にスモール・コミュニティによる市民への信頼醸成(石田氏)、女性と若者が活躍できるコミュニティづくり(穂積氏)という応答、あるいは大島氏の「まちが家族に」という提言にもあるように、小さな場での相互信頼に基づくまちづくりが医療・福祉のまちづくりの根幹であるという方向が提示されたと筆者は理解した。東京にモデルを提供する(安井氏)ための新たな仕組みは、先駆

的な「福祉村モデル」(山本氏)にみられるように、すでに現場の実践の中に存在していること、ただし現場の困難さを直視する中で制度設計を図るべきこと、そのための詳細なデータ分析は可能であること(長谷川氏)などが示された。

○分科会5「越境地域と歴史・文化」総括

和田明美(愛知大学)

分科会5「越境地域と歴史・文化」の研究グループは、「道と越境」をテーマとして三遠南信地域の歴史的な文字資料に着目しながら研究を進めてきたが、今回のフォーラムでは2016年度愛知大学三遠南信地域連携研究センター【越境地域政策研究拠点】共同研究の課題である「三遠南信の「道と越境の歴史文化」に関する通時的研究と社会的還元の試み」の成果の一部を公開するべく、共同研究者・研究協力者を中心に報告・発表を行った。古代より近世・近代に至る千数百年(7・8世紀～19世紀)の文字資料・文献に基づいて三遠南信地域を捉え直し、歴史・地理・文学・民俗・語学の観点から越境地域の歴史文化を位置付け、そのことを通じて今後の展望と新たな地域政策のビジョンを探ろうと試みた。

分科会当日の司会・進行を藤田佳久愛知大学名誉教授に、コメンテーターを北川和秀群馬県立女子大学教授に依頼し、4名が次のような発表・報告を行った。

- 古代東海道・東山道の「坂」「境」と越境-古代日本語からのアプローチ
和田明美(愛知大学教授)
- 古代史料にみる三遠
北川和秀(群馬県立女子大学教授)
- 参河・遠江国と古代東海道
竹尾利夫(名古屋女子大学教授)
- 明治期資料からみた三遠の河川舟運-歴史GISデータベースの構築に向けて-
飯塚隆藤(愛知大学准教授)

特に古代から中世にかけては(7～13世紀)、3名の発表者が東海道三遠地域を中心に「道と越境」「東西国境と地域交流」「東西文化」の観点から、古代の資料(史)としての木簡や『古事記』、『日本書紀』、『続日本紀』等の歴史書、『万葉集』から平安時代の和歌文学、日記

や紀行文等に基づいて実証性に富む報告を行った。

第一報告者の和田明美は、古代東海道・東山道の「坂」と「境」に着目し、古代日本語からの越境へのアプローチを試みた。特に古代の文献に記された「七道」「東海道」「東山道」を中心に「坂」(峠)「境」の用例の分析結果を述べた。東海道は『日本書紀』にも見られるが、道制上の「七道」(東海道・東山道・北陸道・山陽道他)の初出は、大宝律令頒布(702年)に関わる『続日本紀』の記事である(60例)。『続日本紀』の東海道と東山道(中路)は、各37例・35例と大路である山陽道26例を上回り、巡察使・節度使・按察使等の諸使派遣記事を中心に認められる。また国境や境に関する「坂」の代表格は、「足柄坂」「碓氷坂」「神坂(みさか)」であって、「坂」は「越ゆ」と共起している。即ち東国が畿内・西国の政治システムに組み入れられ、古代日本の中央集権化が進むなかで国境も策定され、越境・連携のための道制が8世紀以降政治的意図を持って歴史書に記述される構図が判然とした。

第二報告者の北川和秀群馬県立女子大学教授は、「古代史料にみる三遠」をテーマとして六国史の記事や木簡・万葉集等に注目しつつ、政治・経済・文化の古代東西国境の解明を試みた。古代律令制の時代には、東海道参河と遠江の間に東西の国境が置かれていたにもかかわらず、実際642年の宮室造営(日本書紀)や722年の入京乗馬許可(続日本紀)等に関しては、遠江と駿河の間に境界が認められる。また、万葉集の東歌・防人歌の方言分析の結果、遠江国の後舌母音と駿河国の前舌母音に対照的な動きが見られる。東歌・防人歌の所収は遠江以東であり、当時の参河方言を知る方法はないが、参河・遠江間よりもむしろ遠江・駿河間に一線を画する言語現象が認められる事実は注目に値する。

第三報告者の竹尾利夫名古屋女子大学教授は、「参河・遠江国と古代東海道」をテーマに、時代とともに推移する東国(アヅマ)の範囲を問い、遠江以東の東海道と信濃以東の東山道の歌を収める万葉集防人歌に注目しながら論じた。その上で、古代東海道から分岐して浜名湖北から遠江国へ入る本坂越えの「三河の二見の道」(万葉集・持統上天皇行幸に際しての高市黒人の歌)の位置付けを行った。特に古代東国の範囲は(1)足柄峠(駿河・相模国境)・碓氷峠(信濃・上野国境)(2)遠江・信濃国以東(3)鈴鹿関・不破の関以東と文献により異なっており、道制下での国の所属についても時代によって異同がある。(1)古事記(2)万葉集(3)日本書紀

の相違と位置付けの真意が問われる所以でもある。

最後に、愛知大学飯塚准教授が歴史GISデータベースの構築に向けて「明治期資料からみた三遠の河川舟運」に関する報告を行った。明治中期陸軍参謀本部が編纂した『徴発物件一覧表』(明治23年版マイクロフィルム版・雄松堂フィルム出版)を資料に、物資や旅客輸送を目的とする河川船舶の分析を通して、豊川・天竜川流域を中心とする地域的特色を明確にした。「船舶表」に基づくGISデータ・分布図は、天竜川流域や豊川沿いのみならず、遠州灘や三河湾海岸部、浜名湖岸に船舶定繋地があり船舶数も多いことを示しており、歴史GISデータベースの有効性と今後の歴史地理研究の可能性を提示するものであった。

以上、2016年度越境地域政策フォーラムの分科会5「越境地域と歴史・文化」は、「東海道と越境」「東西国境と東西文化」をコアとして各人が分析・考察を進め、三遠南信地域を中心とする歴史文化の新たな知見に基づく研究成果報告の場となった。今年度は特に古代の三遠地域にスポットを当てるとともに、歴史GIS構築に向けての試案や三遠南信歴史文化GISデータベース・トライアルへの道が提示された点に特色があった。発表者とともにコメンテーターも兼務いただいた北川和秀教授の核心に迫る質問・感想・コメントにより、発表が客観化され深められるとともに視点を变えての位置づけも可能になった。古代は日本の東西国境が推移した時代であり、その影響は現代の三遠南信地域の経済や言語文化圏(境界)にまで及んでいる。もちろん古代より現代に至るまで人々は道を行き交い、国境を越えて交流してきた。発表者が提示した資料は、古代から中世にかけての国境の推移と交流の歴史を反映しており、東西の政治経済・言語文化の境界が画一的ではないばかりか、参河と遠江国の連続性を示していた。参加者も例年より多く、「東西国境・越境とは」等の質問が寄せられ、会場は終始活気に満ちていた。東国と西国の境界に位置した三遠南信地域の多様性が、今日なおこの地域の豊かさを保障していること、また東西越境の地ならではの三遠南信地域の歴史文化の独自性や価値を見直すことになかにも、歴史文化を基軸とする越境地域政策の可能性が潜んでいることを確認しつつ、盛会の内に分科会5は終了した。